

者拒之以不信自棄者起之以不為

人鈍者

大論八十三云世尊是門利根菩薩

子曰氣專志一又唯識論卷三云心專注一境

非道而不辨有法而生無法而不生云云往看

辨道業也總義第一判評云辨道業佛范宗尹

汗从手

云末那

道泉曰

二ころの道元

若さに贈る禪入門

我愛四
泉曰擬

不知知

佐橋法龍

是無記自界他方

法華

恒河沙

起合掌作禮而白世尊言

云云世尊乃自界而釋尊所化之境他方指十

界為方位世界有二種一衆生世界是正報二

者衆生三者國土間之與界名異義同間是隔

云連磨不來東土二祖不往西天西天乃指天

云我試度已後時後分後五百歲甚深般若波

こころの道元



講談社

著者略歴 昭和3年横浜生まれ 昭和26年駒
沢大学専門部仏教学科を経て 東京大学文学
部国史学科卒業 サラリーマン生活も経験し
たのち 現在 静岡県賀茂郡南伊豆町金剛院
住職 全国を托鉢した浄財でこのほど完成し
た禅堂を「居候部屋」と名づけ 人生をまじ
めにみつめる若者の参禅の場として開放する
著書に「禅」「禅入門」「禅の思想」「人間道
元」などがある

こころの道元

——若さに贈る禅入門——

昭和四十八年九月二十日 第一刷発行

著 者 佐橋法龍

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 東京(945)一一二一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 三九〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©佐橋法龍 昭和四十八年

Printed in Japan

こころの道元・目次

第一章 現代社会——ヤングは嘲う……………五

『不立文字教外別伝』

処女喪失 ニヒルな若者たち 人間ぎらいの正体 孤高超俗の禪者 山村

の哲学騒動 不毛の思想 ヤングとオールド

第二章 セックス——性的人間のむなしさ……………三〇

『色即是空空即是色』

ガールハントの倫理 新妻を抱かない若者 浮きあがっている性思想 性行

為のむなしさ 禪と性 色即是空

第三章 非常識——正常とは何か……………五五

『慣習伝道慣習自己』

常識の非人間性 本質を見失う常識 仏教界の大学紛争 コンピューター人

間 思想と自己 正常と異常

第四章 文化——ヒヨコに馬車がひけるか……………七五

『威儀即仏法作法是宗旨』

ヒヨコに馬車がひけるか 外発的な文化 生きることと忘れる 儀式と偶像
の文化 生活を見失った禪 土方になりたがる若者 格に入りて格を出づ

第五章 戦争と平和——浮世ばなれのおはなし……………九七

『懸崖撒手絶後再蘇』

戦艦の凋落と海軍 山本五十六は凡将か 戦争と人間 日本海軍の敗因

戦争論・平和論のあまき 死への逃避 生きることへの挑戦

第六章 挫折——自己再発見の関門……………一二一

『本来成仏妄語』

女に溺れた一休 思想への絶望 挫折と墮落と孤独 道元の挫折 理窟ぬ

きの体験 生の現実をみつめる あきらめの人 一箇半箇

第七章 生きざま——さわやかに崩れる……………一四五

『毀誉褒貶相半則可』

人は宗教のために生きるにあらず 宗教は人が生きるためにある 自己を愛す

るむずかしき 自己本来のすがた 自己に生きる さわやかな生きざま

第八章 体験と思想——考えることの大切さ……………一六五

『冷暖自知言詮不及』

私小説の経験至上主義　　禪の体験至上主義　　禪者の真の權威　　体験と思想

我田引水思考　　學問を知らない禪學者　　禪（宗教）と禪學（學問）　　現代人

と禪

第九章　禪——行動の宗教……………一八七

『離四句絶百非』

禪の第一関門　　生きることへの問題意識　　實地に悟る　　無説無示のねらい

概念・論理をはなれる　　月が二つある

第十章　いなか和尚——自伝的禪放談……………二〇九

『法輪転食輪転』

京染屋の倅　　チンピラ精神　　性格と氣質　　禪と氣質　　非常識のすすめ

しばらく随うということ

あとがき

装幀 小高辰也

こころの道元

——若さに贈る禅入門——

第一章 現代社会——ヤングは嘲^{わら}う

『不立文字教外別伝』

処女喪失

昨年の秋のことだ。

伊豆の南端にほど近い山間の僻村にある私の寺に、高校の三年生になるE子という娘から、こんな手紙が届いた。

拝啓。

和尚さんには、お元気にお過ごしのことと思います。たいへんにご無沙汰いたしております。申し訳ありません。お寺のお世話になりましたから、はや一年になることが信じられない気がします。何度かお手紙を書いたのですが、投函するまでに、どういうわけか、ものすごく勇気がいるのでした。おかしいです……。

和尚さんが知られたら、どんなにかあきれることも、私はしてしまっているようですし、学校も中途半端で、来年は大学に行くことも考えておりません。しいて言うくと、「浪人」するみたいです。

(、印×印とも原文のまま)

読んでいて、×印のところへきたとき、思わず私は、

「馬鹿な——」

と、つぶやいた。彼女は、高校生でありながら、あっさり処女を放棄してしまったのだ。私は、何のためらいもなく、そう信じこんだ。実は、一年前の彼女に、こうなる傾向がはっきり看取できたからだ。また、だからこそ私は、彼女が寺を去るとき、

「娘の体は、決して粗末にせんことだ」

ともいつてやった。

この山寺には、私が禅の書物などをよく書くものだから、読者と称する若者たちがちょいちょいやってくる。女性も珍しくない。

しかし、彼等のほとんどは、よくいえば、現代社会への不信から、疎外された人間の回復と

純粹な自己の確立を求めている若者たちということになるが、ありていは、予定されたお定まりのコースをたどることへの、そこはかとなない反撥にそのかされているだけの、わがままで意志薄弱な——したがって中途半端でしかない若者たちだ。

E子にしてもそうだ。彼女がはじめてこの山寺にやってきたのは、一昨年の秋だが、修学旅行への参加をとりやめ、その期間だけおいてくれといって、とびこんできた。修学旅行のようなくだらぬものに参加するよりも、静かな禪寺でじっくり自分をみつめてみたかったというのが、彼女の語る入門の動機だった。

彼女は、中肉中背の、顔も姿態もとのったけっこうな娘だが、愛嬌となるとまるでなかった。この土地のことばでいうと「笑顔のよくない」子だ。詩作にこっているとかで、はなしてみるとアタマは悪くないが、成績はよくないらしいかった。——といって、それを苦にはしていない。授業なども、やはりむなしのひとことでかたづけける。ゴーゴーを踊りにいったことも再々あるし、ボーイフレンドも立派にもっている。そこで、こんなことをケロリという。

「体を粗末にはしません。でも体って、そんなにこだわる必要ないと思います」

さて——、このような、いとも簡単に性の肯定と解放にふみきってしまう態度は、若い娘として、どういうことなのであろうか。

ニヒルな若者たち

こういう詩がある。

E子を読めば、随喜の涙をこぼすにちがいない。

はつきり云ってしまえば

てめいひとりが かわいいのさ

自己保存なんて キザがることはない

社会とも遊離せず 適当にお体裁よく

母親からも期待され

友人に一喜一憂——愉快でもなし

束縛だらけの生活だ

小さいことしかできないのは当たり前

信念・理想はたくましくなければ

おぼれるまでだ

自己を貫かず 妥協の連続

真に生きちゃいない

金があつて きれいな奥さんがいて

幸福と思えるなら やればいいさ

サラリーマンになりたけりや

精一杯大学を優等で出るさ

芸術をやりたけりや

授業など つまらないだろう

甘ったれた野郎が問題だ！

俺のように 何もしたくなけりや

どうすればいい！

『とろっこ』創刊号所載『あるニヒリストの孤独』より

都会に住む若者たちの間でひとところ人気の高かったミニコミ雑誌に、のっていた詩だ。E子も、自分の詩をガリ版刷りの小冊子にして、駅頭などで売っている。

私は、詩に関してはトンと暗い。したがってこの詩についても、巧拙は何ともいえないが、

面白いとは思った。この詩のもつムードは、まさしく私の山寺をおとずれてくる若ものたちに通じる。

こういうやりきれなさを、一篇の詩に托さざるを得ない作者の、現代の社会と人間への不信もわかる。だが私には、それでいてこの詩がもの足りない。「はつきりいつてしまえば」、作者自身が「キザがつている」「甘ったれた野郎」ではないのか。「思想・信念をたくましく」もち、「自己を貫く」いて「真に生き」そうなるものに思えない。たとえば作者は、

「この詩は、無宿渡世に命をかけて、一人孤独の影を愛する男、その名も高き男の中の男、正次郎のつぶやきである」

といったおどけた調子で、彼のいくつかの詩をあしらった、『あるニヒリストの孤独』という文章を書きはじめているように、「ニヒルな旅鴉」という大衆小説やテレビ・映画のなかにのみ存在する、次元の低い虚構の世界のヒーローの生き方になぐさめを求めている。

「正次郎」という名にしても、あるいは本名かもしれない。だが私には、何となく、ひところ人気絶頂をきわめた木枯し紋次郎をまねたもののように、思える。それも、笹沢左保の原作『木枯し紋次郎』を読んでのことではあるまい。テレビ・映画もしくは劇画のたぐいをみて、「あっしには、かかわりのねえことでごさんす」

ということばを無表情にのこして、長さ五寸（約十五センチ）もある楊枝ようじをくわえながら飄

飄と旅をつづける上州無宿の本枯し紋次郎を知って、心魅かれたのではなからうか。

いずれにしても正次郎君のニヒリズムには、若いものらしい、思想するものの強いひたむきな姿勢が感じられない。在来の価値観をいさましく否定しつつしてはいるものの、その否定のゆきつくところをひたすら追求しようとする激しい息吹きが伝わってこない。いうならば、カッコよさを追いかけるムードだけのニヒリズムだ。もったいえば、自分のきらいなもの、できないものをただただ否定する、感情的恣意的なニヒリズムだ。決して思想といえるようなものではない。

E子の性に対する姿勢にしてもそうだ。性の肯定と解放が彼女にどのような意味をもつかということへの、彼女なりの着実な思索がおよそみられない。ただ感情的恣意的に安易な性の肯定解放にのめりこんでいるだけだ。思想とは、それが人間のいとなみであるかぎり、感情の繫縛ないし影響から完全に脱却することはできないが、しかし、人間の理性のいとなみであることも事実だ。感情的（無定見）恣意的（無方向）なものを思想ということはできない。

人間ぎらいの正体

N君は昨春大学を出たが、就職しないで、気ままに毎日を送っている、ニヒリストを絵にか

いたような若者だ。そのN君が、一日、手紙をよこして、私の寺にきたいといってきた。それもこんな調子だ。

「さて、近く行きたいと思っています。つもるよもやまばなしなどしたい。禅などという陳腐なものに興味はないが、禅者なるものの顔がみたい。八月二十二日に行きます。もし御不在でも、寺をみて帰りますから必配無用（心配無用 筆者注）に願います」

ところが、その日はあいにくと、私の寺に泊まり客があることになっていた。「三人旅は一人乞食」ではないが、N君の来訪をうけいれると、いずれとも私は落ち着いたはなしがでなくなる。そこで私は、

「都合悪し、日を改めよ」

という電報を打ったが、N君は自分の予定通りにやってきてしまった（余儀なく私は、彼を泊めはしたが、はなし相手にはほとんどならなかった）。

N君は、メッタに笑わない。——というより、私はそのとき、ずっともう一人の客と同席させたのだが、翌朝帰るまで遂に一度も笑顔をみせなかった。世の中をすねて歩いている典型みたいな若者で、みずから「人間ざらい」とも称している。しかし、私にいわせれば、「人間ざらい」でも何でも無い。むしろ、人間への愛着は並みのものより激しい。だいたい、「人間ざ